



看護師の資格を持ちながら、医療現場から離れた「潜在看護師」の復職へ向け、様々な取り組みが進められている。そもそも医療現場の変化は激しい。子育てと仕事の両立などの条件が重なることさらに復職へのハードルは高くなる。そんな中、多様な勤務形態が認められ、看護師たちが復職を果たすことのできた医療機関を訪ねた。

(内田健司、写真も)

\*「お互いさま」

## 日勤専従やフレックス

神奈川県川崎市のJR川崎駅から歩いて15分ほどの住宅地にある川崎幸病院(203床)。この病院で、昨年11月から働く非常勤看護師の中、曾根裕美さん(31)は、週2、3回、息子が幼稚園に通う午前9時半から午後1時まで働く。病院の保育室に、息子を預けていた今年3月までは、午前9時から午後4時まで週2回働いていた。

大学病院など計3か所の病院で勤務した後、結婚、出産、夫の転勤などで、復職まで3年ほどブランクがあった。新聞の折り込みチラシで見かけた、この病院の復職セミナーに参加。働き方が自由な選べる病院の魅力を知り、ここで働くことを決意した。

会社員の夫は扶養の範囲内で働いてほしいという意向で、派遣会社にて

## 働き方選んで

## 育児と両立



多様な勤務形態で復職した(前列左から)船橋さんと曾根さん。右端は佐藤看護部長(川崎市の川崎幸病院で)

も登録したが、子育て中であることなどが壁になり、紹介すら受けられなかったという。

「子供が急に熱を出して勤務の日に突然休むことになったときや、業務の途中でも時間で先に帰るときなどは、心苦しい」と話す中曾根さんだが、佐藤久美子看護部長(45)は「本人が思うほど、周囲は気にしていない。お互いさま」と言う。

\*24時間保育室

佐藤部長自身、3人の子供を育てながら看護師を続けてきた。仕事と子育ての両立の大変さを、よく知っているだけに、昨年度に昇格して以来、看護師の採用にあたっては、

日勤専従や短時間勤務など、勤務形態をより自由を選べるようにした。1日28台の救急車が来る日もあり、限られた時間帯であっても、看護師が多くいてくれれば、助かるのは事実だ。

さらに佐藤部長は、働き始めてから「こんなはずじゃなかった」と思われないように、まず現状をよく見てもらうことを心がけている。その上で、お互いに働きやすい環境を作り上げていくため、双方が納得できるように、環境や条件などについて話

し合っていくという。通常の3交代制に加えて、日勤専従、短時間勤務、フレックスと、本人の希望を考慮して契約し、勤務ダイヤが編成されていく。総勢約190人の看護師のうち、午後4時半から午前9時までという夜勤専従正職員が21人いるのも特徴だ。

看護師らにとって強い味方になっているのが、24時間受け入れ可能な保育室の存在。現在、14人の看護師を含め、医師、事務職計30人近くが

利用している。原則的には3歳以下が対象だが、夜勤スタッフに限り、小学校入学まで夜の勤務帯のみ利用することができる。

4月に復職した船橋梢恵さん(26)は、9か月の長男を預けながら日勤専従で週5日働く。中曾根さん同様に、病院の復職セミナーに参加し、そこで、病棟見学や電子カルテの使用手法、注射関係の実技演習などを学んだことがきっかけだった。「保育室だけでなく、研修体制も充実しており、じっくり働きたい」と話す。

川崎幸病院では、2011年度に病院の移転計画が進んでいる。規模が大きくなり、看護師の役割の比重もますます高まる。石井映禔院長は「研修などもさらに充実させ、働き続けやすい環境の整備だけでなく、専門性の高い看護師の養成にも力を入れていきたい」と強調する。



## 看護師の復職支援

上

### 確保・定着に「効果的」

日本看護協会の「2007年病院看護実態調査」によると、多様な勤務形態に積極的に取り組んでいる施設は41.7%。確保・定着のための対策として、夜勤専従、パートタイマー、短時間勤務導入などによる多様な勤務の導入が効果的であると考える回答が約7割に達し、子育て支援策の充実、教育研修体制の充実などが続いた。

同協会は、川崎幸病院のほか、短時間正規職員制度を今年1月から利用できるようにした山口県の萩市民病院など22施設の勤務形態の事例をホームページ(<http://www.nurse.or.jp/>)で紹介している。